

-ハルム・ボイケルス（ライデン大・医）
 一四、鶴崎平三郎と須磨浦療病院……小松 良夫（寝屋川市）
 一五、エルメレンス碑のその後、及び阪大医学部史料室
松田 武（大阪大・医）
 （長門谷洋治）

例会抄録

ハンガリーのゼンメルワイスの遺跡を訪ねて

蒲原 宏

一九九四年四月二十八日から五月五日までハンガリー、ブタペスト市と近郊のゼンメルワイス (Ignác Fülöp Semmelweis 一八一八・七・一〜六五・八・十三) 関係の遺跡および手沢資料を求めておとずれた紀行を紹介した。

医学史(英・米・独・仏・日)文獻に Ignaz Philipp Semmelweis の名称は Magyar 語の転換用語法による。ゼンメルワイス自身もドイツ語論文で転用している。①日本への伝記紹介で死亡年月日が一八六五年八月十四日とあるものがあるが、八月十三日が正しい。②ゼンメルワイスが産科主任となった聖ルカ病院 (Rókus Kórház) はゼンメルワイス病院と呼ばれていない。③ゼンメルワイス医学史博物館・図書館 (Semmelweis

Orvostörténeti Múzeum, Könyvtáras Levéltár) は一九六五年ゼンメルワイスの生誕百年を記念して、彼の生家の跡に、ほぼ原形にもとづいた復原を行なって建設された。十六世紀以前の文獻一五〇〇点、定期刊行物は十八世紀以後のものがそろっている。現在単行本十一万、定期刊行物二万、論文一万、文書資料抜刷等一万が図書館に収蔵されている。展示部門は古代から現代までに及ぶが、ゼンメルワイス記念室があり、一〇九ケースに、その遺品、一族関係の資料が展示されている。

ゼンメルワイスの遺骨は郊外の Kerepesti 墓地から発掘され、現在はこの博物館内中庭の壁の中に収められ祀られている。

その他のゼンメルワイス関係の遺跡としては、一九六九年創立二百年を記念してブタペスト医科大学がゼンメルワイス医科大学と改称されている。市内にゼンメルワイス通り (Semmelweis Utea) があり、聖ルカ病院は現存し、その正面に一九〇六年九月三十日世界中の募金による大理石のゼンメルワイス彫像がある。

王城内にはゼンメルワイス記念金の薬局博物館がある。その中央外壁に赤子を抱く女性像が象徴的である。

聖ルカ病院の入口廊下には彼がここに勤務していたことを記念する巨大な銅牌が二個飾られている。

日本の助産術において、ゼンメルワイス式の手洗方式が日本に定着してゆくのは、明治十一年(一八七八)年頃から山

崎元脩のシュルツェ (R. S. Schultze) の原書訳の『朱氏産婆論』あたりからのように思われる。

ハンガリーの医学史研究は József Antall 教授から Maria Vida 教授へと変つてゐる。

ハンガリー医学史の二、三の参考書を紹介した。

ゼンメルワイス像の記念切手も一九三二年、一九五四年、一九六〇年三月八日国際婦人デー(母親たちの救いの手)、一九六五年の没後百年記念の他に、一九八七年のヒポクラテス、アピシナ、ハーベ、パレとともに五人の医学功績者の一連の記念切手が出されている。

(平成六年一月例会)

A. Vesalius: *Epitome* のラテン語原典

および独・蘭・仏・英語版の特色 (一)

近藤 均

(1) 研究発表までの経緯

人体解剖学の基礎を据えたヴェサリウス(慣用にしたがつてこう表記する)の著作の書誌学的研究は、前世紀末の M. Roth による伝記の刊行によって先鞭がつけられた。そして今世紀中葉に H. Cushing が原典や各国語訳の現存状況を調査し詳細な関連文献リストを作成したことによって、本格的な研究が可能となった。主著である通称『ファブリカ』はよく知られ、日本国内にも原本が少なくないが、そのダイジェスト版で初

学者向けに編まれた通称『エピトメ』のほうは、数ヶ国語に訳されて『ファブリカ』よりも影響が多大であったにもかかわらず、国内外を問わず本格的な研究はほとんどない。『エピトメ』研究には、①一五四三年刊のラテン語原典はもちろん、②同年刊の独語版、③一五六九年刊の蘭語版、④同年刊の仏語版、⑤一九四九年刊の英語版の参照が必須である。しかし、①④の現物は『ファブリカ』より遙かに貴重で、世界中の公的機関を合わせても各々せいぜい二〇冊ずつしか現存せず、日本国内には皆無と推定される。筆者は②③④のマイクロフィルムを、②はハーバード大学図書館、③はベルギー王立図書館、④はニューヨーク医学アカデミーから入手した。①については、⑤の巻末収載の縮小ファクシミリを参照したが、一部不鮮明な箇所は、カンザス大学メディカルセンターから提供されたフォトコピーも参照した。本研究発表は、以上の入手資料から確認し得た①④⑤の特色を、スライド供覧のうえ二回にわけて報告するものである。

(2) ラテン語原典の特色

『ファブリカ』初版とほぼ同時期に同じくパーゼルで刊行され、判型は『ファブリカ』の四三×二九糎ほどに対し、それよりかなり大きく五五×四〇糎ほどである。本文・付図・付図解説など紙葉一四枚からなり、販売時には無綴で表紙もなかった。『ファブリカ』初版と共通な扉絵に始まる一二枚二三頁分(一二枚目は片面印刷)については、各自で綴じる旨の指示がある。他の二枚(片面印刷)は付録の剪型解剖図集(後述)